

聞名仏教

第 148 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 1 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

“けれど” “が残る” 佐々木蓮磨

私が大谷大学において教
えをうけた先生は沢山あり
ますが、中でも最も印象の
深い先生はなんといつても
佐々木月樵先生であります。
先生の一言一句は深く心
に刻みつけられて四十数年
経た今日においても、つね
に思い出されて、私を導い
て下さるのであります。

あるとき先生がおっしゃ
るには、
『人間世界は、いかなる場
合でも、“ケレドモ” がつ
いて割り切れない。例えば
大学を卒業すれば、そこで
ひとまず落ちつくべきであ
るが、「大学は卒業したケレ
ドモよい職につけない」と
こぼす。仕事に成功すれば、
満足すべきであるが、なか
なか満足はできない、かな
らず、“ケレドモ” がつく、
即ち仕事には成功したケレ
ドモ思うように金がもうか
らぬと不足をいう。そんな
わけで、人間世界はいつま

でたつてもケレドモがつい
て「これでよい」というこ
とにはならぬものである。
しかし、この“ケレドモ”
があるからこそ宗教もある
のである。“ケレドモ” が
無くなったら宗教も無くな
るであろう云々』

といわれたのを記憶してお
ります。が、いかにも人間世
界の実態をあばいて下され
た言葉であるように思いま
す。
ところで、この“ケレド
モ”があるからこそ宗教も
ある、と言われた点を少し
究明してみたいと思うので
あります。
もし人間世界が、万事、
簡単に割り切って行けたな
らば、そこには問題はあり
ません。したがって苦しみ
や悩みもないわけでありま
す。苦悩のないところには
宗教はあり得ません。人間
以下の下等動物は感覚的の
苦しみはあっても、精神的

な悩みというものはありま
せん。感覚的の苦しみは一
時のもので、その時、その
場が過ぎれば消えてしま
うものです。たとえば犬や猫
は飢えてくると苦しみま
す。食が与えられると、そ
れで満足して眠っておりま
す。しかし人間は食が与え
られても、必ず“ケレドモ
”がついて満足ができない
ものです。即ち「今は食え
るけれども将来はどうであ
ろうか」と次から次へと問
題を持つようになります。

これは知能のすぐれた人
間ほど甚だしいようです。
現代人は昔の人に比べると
苦悩が多いと言われるのは、

神病が流行しておりますが、
これは現代人の知能が進ん
だために起こり易くなった
とも言えるのではないでし
ようか。そこでノイローゼ
のことを俗に現代病とも言
われております。
こうした人智の進歩から
来る精神的悩みばかりは、
人間の知恵で解決すること
は不可能です。

ここにおいて一度人間は
無智、無力、無能の世界に
転落し、人間以上の大いな
る力に摂取されることが必
須条件となるわけでありま
す。これが即ち宗教の世界
に入りましたというものでは
ないでしょうか。(了)

一面から言うると人智
の向上から来るもの
と言っても過言では
ないでしょう。今日、
ノイローゼという精

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

令和五年元旦

土井紀明 中川政二
土井眞由美 吉田徳子
足立美明 中村泰司

現代真宗問答 13

B 「世間ではよく〈死んだら仏〉なんていいいますが、これをどう理解すればいいですか」

A 「まずこの場合の〈仏〉をどう受け取るかです。〈仏〉を守護霊なり、死んだ靈魂なり、霊的存在などと考えているなら、それは通俗的であって、仏教のいう〈仏〉ではありません」

B 「では仏教では〈仏〉をどう教えられているのですか」

A 「仏は仏陀のことで、仏陀はインド語のブツダの音訳で、意味は自他一如の真理に目覚めて、その真理を他の者たちにどこどこまでも目覚ましめようとはたらくお方のことです。歴史的には釈尊などのことであり、さとられた法からいえば阿彌陀仏などのことです」

B 「では仏教では〈死んだら仏〉といわないのですか」

A 「右のような通俗的な意味で〈死んだら仏〉とはいいません。亡くなった方に對して死んだ人を〈仏〉〈仏になつた〉とよく世間でいわれますが、この場合は注意しなくてはなりません」

B 「どういうことに注意するのですか」

A 「ただ、だれであろうと死んだ人はみな仏になるとか、死んだ人はみな浄土に生まれるのだ、ということでは仏教でいいません。ただ死んだ人をどう私が受け取るかという場合に、〈死んだら仏〉を、

『死んでいったあの方は私にとつて〈仏であつた〉』と敬うことがあります。これは仏教の教えから言えますし、間違いではありません。私にとつてあの方は私に法を説いてくださった方であつたとか、あの人のおかげによつて私は仏法に出会うことができ、お念仏を

申す様になつた、あの方は私にとつて〈仏様〉であつたと受け取る場合があり、これは仏教的な受け取り方です。そしてこの場合の〈あの方〉は必ずしも私にとつて善良な人ばかりとはいえません。中には私に危害や迫害をする人たちにも言える場合があります。そんな人によつて、私が仏法に入る縁になつてくださった人、仏法への信頼を強くしてください。あなたとして、その方を〈仏〉と受け取る場合があります」

B 「そうすると自分に対して害を与える人に対しても、あの人は〈仏だつた〉と言える場合があるのですね」

A 「ええ、仏教では逆縁といつて、自分に対して苦しみをもたらす人がいて、その人の行いによつて、かえつて自分自身の姿に気がついたり、仏教を聞くようになったり、お念仏を申すようになったり、あるいはますます阿彌陀仏の大悲心に気がつくようになったりする、そういう仏縁を与えてくれた人として、その人を〈私にとつて、あの人は還相の菩薩であつた〉とか〈仏様のお計らいであつた〉と受け取ることがあります」

B 「要するに他者に対して、〈私はその人をどう受け取るか〉によつて、人に対する見方が変わるのであり、死んだ人を〈あの人は私にとつて仏様であり、還相の菩薩であつた〉と受け取ることができるといふことですね」

A 「ありますが、しかし人はだれでも死んだら〈仏になる〉あるいは〈浄土に生まれる〉、というようなことは仏教では申しません。そういう話を時々聞きますが、これは誤解されやすいです。少なくとも浄土真宗の聖典の中に、〈死にさえすればみな仏になる〉とか〈浄土に生まれる〉などという言葉はありません」

B 「今までは〈私にとつてあの人は仏であつたか、そうでなかつたか〉を中心にお話をしていただきましたが、〈私は死んだら仏〉になるかどうかというがやはり一番大事な私自身の問題になります」

A 「それは注意しないと仏教無用論になります。仏教の教えも聞かず、本願も信ぜず、お念仏も称えない、それこそ仏教否定の人でも、あるいは犯罪に手を染めて殺人をしたり、詐欺をしたりで悪業を犯して死んだ人も、〈すべて仏になるのですよ、浄土に生まれるのですよ〉という風に受けとられかねません。これは邪見になりかねません」

A 「そうですね」

B 「真宗では〈死んだら仏〉になるとすれば、どういわれるのですか」

A 「これは真宗にかぎりませんが、死んで仏になるには仏に成る因がなければなりません。死にさえすれば仏になるなどはいえませんが」

B 「では仏になる因はなにですか」

A 「各宗にはそれぞれ仏に成る因が説かれています。真宗では本願を信じる信心一つで死ねば浄土に生まれ、て仏に成ると親鸞聖人はいわれています」

B 「本願を信じる信心が仏に成る因なのですね。ということとは信心がなければ死んでも仏には成れないということですね」

A 「ええそうです。真宗において本願を信じる信心が浄土に生まれる、あるいは仏に成る正因と教えられています。ですから信心をいただくということが極めて大事だということですね」

B 「ですけど、よく十劫の昔に法蔵菩薩は阿弥陀仏になっておられるのだから、全ての人はすでに助かっている、だからこのまま仏に

なる」のだとか、(浄土は無量無辺の領域だから、今此処が既に浄土の中にある)、などといわれたりしますが、それはどうなんですか」

A 「仏教では、縁起の道理でものごとを捉えるのが基本です。それを主客一如とか自他一如とかいわれています。すなわち知るものと知られるものは一体であつて離れないという真理です。仏になるということとは仏の悟りを開いて仏になるのですから、悟りの智慧がなければ仏になるということはありません。ただ単に死んだからといって仏の悟りが開けるわけではありません。知る者と知られるものは一体ですから、知られるものとしての浄土は知るはたらしきであるさとの智慧がなければ、たとえ浄土に生まれても浄土を感得できないでしょう」

B 「難しいですね」

A 「これは何も仏教だけの真理ではありません。普遍的な真理だと思います。なにごとともそうですね。目の

前に机があり、手足があり、山や川があるという場合も、机があると(知るはたらき)がなければ、机も山も川もないのと同じです。その人に音を聴くはたらきがなければ音楽はないのと同じです。他の人がいや音楽はあるではないかといつても、その人に音を感じするはたらきがあるから言えることです」

B 「なるほど、知るはたらきがなければ、知られるものはありえないですね」

A 「これと似た話が清沢満之師の座談の中にあります。それは

ある人先生に尋ねて言ふには、「如来は無条件のお助けであるというのに、何故に信心が必要なのですかと。」

先生曰く「疑がはれねば、極楽の真中に在っても快とならぬではないか」と。

『清沢満之先生のことば』永田文昌堂

疑いがあつて信心の智慧がなければ、たとえ極楽浄土の中においても、極楽の功

徳は感じられない、いわば

浄土は感得できないといわれるのです。信心とは浄土を感知し仏を感知する心です。だから信心がなく、迷いの心だけでは、浄土に生まれなくても、浄土が分からず、み出すといえましょう」

B 「そういうことは文献上どこにいわれていますか」

A 「たとえば、天台宗で大事にされている天台大師の『摩訶止観』に、

『魔界即ち仏界なり、しかも衆生は知らず、仏界に迷つて横に魔界を起し、菩提のなかにいて煩惱を生ず』(『摩訶止観』下三三六頁。岩波文庫)

魔界はもともと仏界の外には無く、魔界は仏界のなかで迷える衆生が妄想で作り上げた世界です。衆生は迷いの心によって魔界を起すのです。魔界は実体がないのですが、迷いの妄念妄想によって現れてくる世界をここでは魔界というので、畜生などの苦しみの境界で

す」

B 「分かりました。死んだらみな浄土に生まれるのではなく、浄土に生まれるには仏になる因が必要で、それが信心であり、信心は真実(如来・浄土)を感得する智慧なのですね」

A 「ええそうです」

B 「では、そういう信心がない場合は、死んだらどうなるのでしょうか」

A 「もし迷いの心しか無いならば、迷いの心に応じた世界を感じると説かれています。真理に無知であり、妄念妄想しかない心だと、死ねば、その妄念妄想が生み出した世界が現れましよう。たとえば、迷つていて瞋恚の煩惱が強い場合には地獄の世界が出現するといわれます。もし貪欲の心が一杯ですと餓鬼の領域が現れるといわれています。これは何も不思議ではありません。この世でも怒りや不足不満で心が一杯になって

いる時は、世間そのものが闇であり嫌な世界であり、敵や仇がまわりにたくさんいると感ずるようになるの

と同じです。いわゆる知る心に応じた世界が現れるという事です」

B「では、仏法を学び、念仏を申してもなお疑いがある、いまだ信心が頂けない人はどうなるのでしょうか」

A「仏法に触れ、仏道を歩んでいる人にたいして、阿弥陀仏は化土という仮の浄土を開いてくださって、すぐには真実の浄土へ生まれることが出来ない者をも、化土という浄土の片隅の領域を開いてそこに生まれさせて、そこでさらに教化されて後に浄土に生まれさせてくださると説かれていきます。」

B「なぜ阿弥陀仏は化土をも開かれたのですか」

A「それは阿弥陀仏は大慈大悲の仏様です。一切の衆生を助けなければご自分が仏には成らないとまで誓って御修行されたのです。そして一切衆生を仏にする力を成就してはたらいてくださっているのです。一切衆生を必ず仏にするとはたらいて、この

短い人間世界で仏になる法を頂けないものをも、未来に必ず仏にする誓ってくださった、その大悲のはたらきが化土を開かれたのです」

B「では、もし地獄に堕ちた衆生はどうなるのですか」

A「阿弥陀仏は十方衆生を助ける力を成就してくださっているのです。十方世界の衆生をとということですから、地獄に堕ちた衆生にも救いのはたらきをしてくださっているという事です。そのはたらきによって、地獄から遂には解放されて浄土に導いてくださるといっていただいています」

B「時にはお話で、輪廻(流転)なんか無い、死んだら皆浄土に帰るのですよ、という様な話も聴きますが」

A「これも同じで誤解されやすいというか、浄土教にはない話です。宗祖の和讃には、

無始流転の苦をすてて

無上涅槃を期すること

如来二種の回向の

恩徳まことに謝しがたし

とあります。ここには私たちは今まで生まれ変わり死に変わりし続けてきたという宗祖の世界観があります。聖人の教えをまず素直に聴かせていただくことです」

B「もう一つお尋ねします。本願を信じる信心は浄土に生まれる因であり、それは浄土にて仏の悟りを開くのですから、信心には悟りの智慧と同質であるといわれますね。あるいは信心は仏のお心を知る心ですから、仏を知る心は仏の心と同質の心でなくては仏を知ることとはできないと聴いたことがあります。にもかかわらず、この世で信心をいたさないし仏にも成れません。どうしてですか」

A「信心は凡夫の心ではなく、凡夫にいただいた仏心です。仏心ですから悟りの心と同質です。しかし、この世においては煩惱の心、煩惱が形を取ったとさえいわれる身があるかぎり、煩惱の心にさえぎられて、信心の智慧があつても浄土を

感知するのははなはだ難しく、この世で仏になるということはできません。それこそ信心の人も(死ななきや仏になれない)のです。ご和讃にはそのことに関して、

煩惱にまなこさえられて
撰取の光明みざれども

といわれています。ちょうど雲霧が空にあると太陽が見えないのと同じです。ただし、太陽は見えない、いわば浄土や仏は見えないけれども、(雲霧之下明無闇)と正信偈にいわれているように、いわゆる曇りの日のように太陽は見えなくても、雲の下は真つ暗ではありません。それなりにあかるいのです。そのように煩惱の雲に覆われていますが、信心の人の人生は暗闇ではないのです。それなりに明るいのです。本願を信じたからといって、浄土がクリアーに見えるわけではありませんが、しかし有難いことに闇ではないのです」(了)

【住職雑感】

正月三日、この文を書いている。元旦は坊守と二人で朝事の勤行、その後頂いたおせちとドブロク、それに雑煮を頂きながら年賀状を拝読する。午後に近くの河川敷を歩き、夕方息子一家四人が来たので夕事の勤行。勤行後、昔南インドで遭遇した菜食経験について話す。孫にお年玉。夜は、昔は必ず見ていた紅白は祝のこともなく、テレビで youtube のコンサートをなどを視聴。正月二日は午前中は文書作業、午後今度は娘と孫二人がやってきたので共に勤行、昔出遇った高僧の話をし、お年玉。娘婿はこの七日にオランダに行く準備で欠席。例年は家族全員が二日に集まるがコロナと息子の孫二人は受験なので一緒に集まらず別々になった。会食も無いので、坊守は午前中にガーデンズという阪急系のショッピングモールでケーキを買い、それを紅茶でいただく。娘の孫は受験はないのでゆとりである。孫に将来何をしたいかと訊くも特になしとのこと。何をしてもない正月であるが、平穩に過ごしていることは有難い。正月三日は午前中は文書作業、午後は坊守と河川敷を一緒に歩く。川に渡り鳥が沢山遊んでいる。寒さに震えているウクライナ人の事など、頭から抜けている始末である。